

論 説

植民地経験の動態性を掴むために ——日本統治期インフラの歴史性への人類学アプローチ——

渡邊 泰輔

はじめに

- 第1節 植民地経験と歴史性の人類学
 - 第2節 地域概要：新社開拓史
 - 第3節 白冷圳をめぐる「まちづくり」
 - 第4節 日台交流と景観創出
 - 第5節 白冷圳と辰巳用水
 - 第6節 考察：植民地経験の動態性
- おわりに：考察と展望

(要約)

台湾を対象とする社会・文化人類学では、2000年代以降に日本統治経験の台湾社会への影響や台湾の人々がもつ日本への認識を問う研究が隆盛した。それらの研究群では、1990年代以降の台湾の民主化・本土化というマクロな社会的・政治的变化を意識しながら、現在台湾で生きている人々の目線に立った研究が目指された。とくにモノに着目した先行研究では人とモノや人と人の関係から歴史認識を研究してきたが、モノとモノの関係については議論していない。本論の事例となる日本統治時代に建設された台中市の灌漑インフラ「白冷圳」は、震災を機に地域住民に文化的価値が「発見」され地元の重要施設と位置付けられ、日台交流の起点となり、さらに石川県金沢市の同工法を使った水路と関係づけられた。本論は、白冷圳への認識の変化を人類学における「歴史性」(historicity)の議論を援用して考察し、台湾の植民地経験の動態性をより多角的に分析する方途を提示することを目的とする。

はじめに

1. 本論の目的と背景

台湾を調査地とする社会・文化人類学（以下、人類学）では、2000年代以降に日本統治経験の台湾社会への現在まで続く影響や、現在台湾で生きる人々の「日本」¹への認識・記憶を明らかにする研究が隆盛した（詳しくは第1節）。本論ではそれらの研究群を「植民地経験の台湾人類学」と称する。そこでは、1990年代以降の台湾の民主化・本土化というマクロな社会的・政治的潮流を意識しながら、現在台湾で生きている人々の目線に立った研究が目指された。

本論の事例である台中市新社区にある日本統治期に建設された灌漑用のインフラストラクチャー（以下、インフラ）「白冷圳」^{はくれいしゅう}は、1932年に完成し戦後も使われ続けたが、老朽化が進み廃棄も検討される存在だった。しかし1999年の震災による損傷を機にその文化的価値が「発見」され、2016年には「文化資産」（日本の文化財に相当）に登録された。白冷圳へのこの認識の変化には、台湾社会全体の変化や現地の実践（社区総体营造）だけでなく、日台の交流が少なからぬ影響を及ぼしている（第2節～第5節）。

以上の点は「植民地経験の台湾人類学」の諸先行研究が扱ってきた事例と通ずるものが多い。しかし、白冷圳が日台交流や文化資産化の過程で石川県金沢市の同じ工法を使った水路と関係づ

けられていったこと（第4節～第5節）、言い換えれば「モノとモノの関係」が歴史認識に与える影響は先行研究では扱われていない。そこで本論では、人々がいかにして歴史を再構築しているかを明らかにしてきた人類学における「歴史性」（historicity）の議論、とくに歴史記述やアーカイブと歴史の関係に着目した研究を援用し、モノとモノの関係からどのような歴史性が構築されるかを考察する。

本論の目的は、「植民地経験の台湾人類学」の批判的検討を通して、絶えず変化する台湾の日本統治経験への認識・記憶の動態性を分析するためには、モノとモノまで視野に入れる必要があることを示し、それを分析する方途を示すことにある。

2. 本論の構成と研究方法

構成は以下の通りである。まず第1節で「植民地経験の台湾人類学」の先行研究をレビューし、それらの研究がモノとモノの関係まで扱っていないことを指摘する。そして、人類学における歴史性の議論を参照し、本論の視座を提示する。第2節では白冷圳が水を送る台中市新社區の概要を示す。第3節では1999年の被災を機に勃興した白冷圳をめぐる「まちづくり」（社区総体营造）の活動を追う。第4節では、2011年以降に始まった新社區と日本の石川県金沢市との交流とその成果が景観にどのように反映されているかを紹介する。第5節では文化財認定申請書から白冷圳にどのような「価値」が公的に付与されているか読み解く。そして第6節で本論の事例を考察し、最後に今後の課題を提示する。

本論に関する調査は、おもに文献調査によるものだが、2022年9月、2023年9月に台中市新社區で行った短期調査（インタビュー調査を含む）も一部含まれる。対象としたのは、新社區の白冷圳に関する社区総体营造団体「白冷圳水流域発展協会」（旧・白冷圳社区総体营造促進会）の職員や団体と関連のある人物である。インタビューでは、筆者の中国語能力を補うために翻訳アプリや文書を用いたほか、社区総体营造団体の本部を訪れた際には日本語を話せる人に通訳してもらうこともあった。日本に帰国してから、SNSを通じて事実確認をすることもあった。

第1節 植民地経験と歴史性の人類学

1. 「植民地経験の台湾人類学」

台湾は日本が最初に植民地化した土地であり、日本の人類学教室が最初に立てられた場所にもかかわらず、日本の人類学者は台湾における植民地主義について長らく考えてこなかった（山路2002、30頁）。しかし、1990年代以降、日本の人類学で植民地主義を再検討する研究（e.g. 山下・山本編1997）が生まれてくるなかで、台湾を専門とする人類学者たちも1990年代から植民地主義研究を開始した（e.g. 中生1993；山路2004）。この研究の変化には、台湾社会の変化が関係している。長らく続いた戒厳令が解除され、民主化が進んだことで、「政治的なタブーや単一のイデオロギーの文脈から解放され、比較的価値中立的な立場から研究を行うことが可能になった」のである（三尾2009、58頁）。

2000年代に入ると、植民地主義研究を引き継ぎながらも、現在台湾で生きる人々と日本統治経験の関係に焦点をあてる研究群が誕生した。嚆矢となったのは、2006年に『アジア・アフリカ言語文化研究』に掲載された「特集：台湾における日本認識」（三尾編 2006）である²。同特集では生活のそこかしこに日本統治経験の影響が埋め込まれた台湾で、「日本」がどのように認識されているかが考察された。同年には論集『戦後台湾における〈日本〉』（五十嵐・三尾編 2006）が出版され、社会変化とともに変化する「日本」認識や、日々の文脈の中で活用される日本（語）などが議論されただけでなく、過度に台湾に日本の影響を見出すことの反省、日本以外との台湾の関係性をみる必要性が提起された（五十嵐 2006、8-10 頁）。また、同書では台湾の植民地経験の諸相を研究することが、安易な台湾親日言説への批判にもなることが筆者の主観とともに指摘されている（五十嵐 2006、2-3 頁）。三部作の最後となる『台湾における〈植民地〉経験』（植野・三尾編 2011）は、「日本」だけでなく「中華」も視野に入れることで、より生活世界の目線に立った台湾の人々の自己認識の探究が試みられた。また、前作（五十嵐・三尾編 2006）への書評を受け、「ナショナリズム」と「植民地統治と『近代』」という視点が導入された（植野 2011、5-7 頁）。

上記三部作は、論集ごとに議論を整理したり新たな視点を導入することで、台湾の人々の実情により迫ろうとした。本論では、こうした台湾を調査地とし日本を含めたさまざまな外来政権の影響、人々の記憶・認識およびそれによる文化構築を問う研究を便宜的に「植民地経験の台湾人類学」と呼ぶこととする。その調査対象・調査方法は多様で、必ずしもすべての研究が「認識」を扱っているとは言えない。しかしながら、共通するテーマや注意点などは存在する。以下では、筆者の視点からその共通性を三点挙げてみよう。

- ①日本を含めた外来政権による統治の影響（物質的・心理的等々）を考察する
- ②現在台湾で生きる人々の外来政権への認識を、社会変化を踏まえながら考察する
- ③外来政権の影響を過度に強調せず、人々の生活世界に立った研究が目指される

この三点を踏まえながら「植民地経験の台湾人類学」は、上記三部作を直接的・間接的に継承しながら、比較研究（三尾・遠藤・植野編 2016）、越境（植野・上水流編 2020a、2020b）、宗教（三尾編 2022）など新たな視点やテーマのもと続いた。以下では本論の議論と親和性の高い、モノに関する議論に絞って先行研究の内容と課題を示す。

2. 植民地経験とモノ

2016年の論集『帝国日本の記憶』（三尾・遠藤・植野編）で、人類学者・上水流久彦は植民地期建築物の古蹟認定に関する比較研究を行っている。上水流はこれまでも台湾における日本統治期建築物の古蹟認定を研究してきたが（e.g. 上水流 2007）、ここでは建築物の受容を四つに分類しながら、「日本」への認識が生まれる要因を考察している³。一つ目の受容の仕方は、植民地期の負の記憶の残存物として破壊や放置の対象となる「外部化」である。次に、建築物を歴史の一部として認識し古蹟化していく歴史主義的な動きは、否定的な側面を出しながら歴史化する「内外化」と、日本の要素を肯定的にとらえて他者との差異化に用いる「内部化」の様態がある。最後に、日本という出自が脱色されオシャレな建築物として消費されたりすることで日常に溶け込

む「溶解化」の様態がある。四つの様態の中でも、「内部化」は韓国やパラオでは見られない現象である。では、なぜ、かつての統治者である日本がつくった建築物が「内部化」されるのか。上水流によれば、それは政治的・経済的・文化的関係からくる日本への親近感からである。厳しい弾圧を行った国民党への反発、経済発展における日本の重要性、若者の間での日本のサブカルチャー受容、反共から始まるアメリカを含めた政治的結束、それらの要素が日本への肯定的評価を生み、「内部化」をもたらしたとされる（上水流 2016）。

上水流は社会状況に置かれた記憶の政治を古蹟認定から明らかにしたが、どのようにしてその建築物が古蹟となっていくのかという実践過程、認識の変化過程が抜け落ちている。一方で、人類学者・三尾裕子（2017）は、「日本神」（廟に祀られている日本人）に関する研究で、征服者や植民者などの権力者やそれらに由来するモノが神格化されるプロセスを明らかにした。三尾が扱った日本人を祀った廟は、火葬場という台湾で忌避された場所に建てられており、祭祀を行うようになった当初は周囲に理解されなかった。しかし、祭祀実践が繰り返されることで、（完全ではないが）火葬場という空間は浄化され、日本人の霊魂も台湾の民間信仰に位置付けられた。日本人を祀ることを可能にした背景には台湾の民主化があるが（三尾 2017、24 頁）、廟の建立や祭祀実践により火葬場という植民地主義に結びつく制御不可能な社会的記憶の場を「飼いならす」（三尾 2017、22 頁）様を明らかにしたことは、上水流の研究を補完する議論となるだろう。

2020 年の論集『帝国日本における越境・断絶・残像：モノの移動』（植野・上水流編 2020a）は、建築物（上水流）や「日本神」（三尾）などそれまでのモノに関する研究を整理し、（時間的・空間的）「越境性」と「エージェンシー」から議論が展開された。その序論で植野弘子と上水流久彦は、人類学におけるモノ研究を参照しながら、ある状況下で「人とモノ」が相互に働きかけ、記憶や感情、認識などに作用する複雑な様相を分析する必要性を説いている（植野・上水流 2020、38-48 頁）。「日本神」を例にすれば、民主化という社会状況の上で廟や霊魂、祭祀実践の相互作用を通じてその現象が分析できる。

さらにこのような視点から、帝国内の人とモノの関係だけでなく、モノを介した帝国の外部まで広がる「人と人」の関係が見えてくる。たとえば、パイナップルがハワイ・沖縄・台湾を（八尾 2020）、米が沖縄・台湾を結びつける（松田 2020）。また、近年ではモノだけでなくそれを取り巻くメディアの存在を無視することはできない。人類学者の藤野陽平は、「日本神」をめぐるメディア分析から、日台で「日本神」への認識にズレがありながらも、日台の交流により「台湾の民間信仰をベースにアイコンとしての日本がちりばめられた独特な空間」（藤野 2022、73 頁）が作りあげられていることを明らかにした。そうした空間とは、「すでに完成した静態的なものではなく、日本神を取り巻くさまざまなアクターとの関係の中で構築され、構築された日本神が新たな関係性の中で再帰性を持ち、つねに刷新されていく」（藤野 2022、79 頁）動態性のなかにある。

本節ではここまで「植民地経験の台湾人類学」の研究史と、その中でもモノに関する先行研究を扱い、それが人とモノが相互作用する動態性まで視野に入れた分析を行っていることを示した。しかしながら、先行研究では人と人、人とモノについて考察する一方、「モノとモノ」の関係に

は言及していない。はたして帝国のモノと被植民地のモノの間には戦後どのような関係性が構築されているのか、そして植民地期のモノに再帰的にどのような意味が付与されているのか。本論では、次節から植民地期インフラへの認識の変化（人とモノ）と、それを中心とした人と人のつながり、そして日本にある同じ工法を用いた用水路といかに結び付けられているか（モノとモノ）を明らかにする。

しかしながら、本論はあくまで文献資料に基づいた調査であり、人々の認識を明らかにするには不十分だという意見があるかもしれない。これまでも文献資料から認識を明らかにする研究は存在するが、本論では「歴史性」(historicity) の議論、とくに歴史のアーカイブと歴史認識の関係を議論の補助線として提示したい。

3. 歴史性の人類学

歴史性の人類学は、歴史人類学の下位分野の一つに位置付けられる。その理論的特徴は、西洋思想のように歴史を過去に起きた静的なものと捉えず、現在との関係において再構築される動的なものにとらえる視座にある (Hirsch and Stewart 2005 ; Stewart 2016)。西洋とは異なる歴史認識のあり方が存在することを指摘し、歴史性議論の先駆けとなったのはレヴィ＝ストロースだった。彼は、西欧のような歴史的生成を原動力とする社会を「熱い社会」、非西洋のような歴史的变化ではなく安定を求める社会を「冷たい社会」と呼び区別した (レヴィ＝ストロース 1976、279-281 頁)。レヴィ＝ストロースの議論を引き継ぎ、サーリンズは、出来事が構造によって意味を与えられること、「異なる文化に異なる歴史性があること」(サーリンズ 1993、9 頁) を構造主義的歴史研究から明らかにした。

歴史性の定義は曖昧だが、大貫恵美子は、歴史性を「文化的にパターン化された歴史を経験し理解する方法」(Ohnuki 1990、4 頁) と定義し、その特徴を以下の四つ指摘した (Ohnuki 1990、20 頁、イタリック体は原文ママ)。

- (1) 歴史性は、非常に選択的である傾向があり、それは時に意図的である。このことは歴史的表象において歴史性を理解することがきわめて重要であることを示している。
- (2) 特定の人々の歴史性は、多様な歴史の表象を含んでいる。私たちはハワイの歴史 (*the Hawaiian history*) を語るができないように、ハワイの歴史性 (*the Hawaiian historicity*) についてもはや語ることはできない。
- (3) 歴史性において、過去と現在は隠喩的、換喩的な関係性により相互に依存し、相互に決定される。
- (4) 過去（または歴史）の「構造化」は、歴史を構成する人々の意図や動機によりしばしば緩和される。

大貫の整理は重なる部分も多いが、意図的であること、複数存在すること、現在と過去の相互作用により決定されることという歴史性の大きな特徴を端的に指摘している。歴史性の視点に立てば、西洋の歴史観もまた特定の文化の歴史性が反映されたものでしかない。ただし、それは対象地域の歴史性を純粋化することを意味しない。歴史性は、社会状況により変化するし、「人々

は1日の内に複数の異なる歴史性を享受するかもしれないし、それらを組み合わせて新たな合成物を作るかもしれない」（Stewart 2016、7頁）。本節前半で紹介した「植民地経験の台湾人類学」は、「歴史性」という言葉を使わないが議論の方向性で多くを共有していることは明らかだろう。

歴史性の人類学は、過去を知覚し、理解し、解釈し、表象する多様な方法を明らかにすることを目的とする。そのため調査方法も多様だが、ここでは本論の補助線として歴史記述とアーカイブに着目した人類学者・河合洋尚（2019）の研究に注目する。河合は、中国福建省の寧化石壁がいかにして客家の歴史の重要な場所として認識されるようになり、それが景観へと反映されるようになったかを歴史性の視点から分析した。河合によれば、寧化石壁が客家と結び付けられたのは、寧化石壁を客家のルーツとする民間の語りが「族譜」として文字になり、宣教師や学者などがそれに「科学的」正当性を与え、さらに政治的権力がそれを「正史」と認め景観として可視化するプロセスの結果である。そして誕生した「歴史」は、人々の歴史認識や客家のアイデンティティに作用していく（河合 2019）。

本論は、河合の議論を補助線とし、テキストや景観など「歴史」を示す物質と歴史認識・実践の絶えざる相互作用から植民地期のモノの歴史性へとアプローチする。

第2節 地域概要：新社開拓史

白冷圳が水を送る台中市新社区は、市の中心から車で一時間ほど行った山間部に位置し、北側は石岡区と豊原区、西側は北屯区と太平区、南側は南投県、東側は和平区と隣接している。和平区から台中市北部を東西に横断する河川「大甲溪」が流れ、これが白冷圳の水源である。人口は2023年1月現在23,283人で、その内原住民が307人いる（臺中市政府民政局人口管理統計平台）。人口が集中しているのは、おもに北西部の河岸段丘の地帯である。本論ではこの地帯を「新社区」と呼ぶ。

大甲溪の水と新社区の人々の生活は切っても切り離せない。地下水面の低い河岸段丘の段丘面からは湧水が発生し、そこに集落が形成されていった。大甲溪は、新社区に飲み水を供給するだけでなく農業用水の供給源でもあったが、それは十分な量とはいえず、また砂利層が厚いために水を汲み出すのも困難だった。地表面の水も少なく、地下水の汲み上げも困難であることから、一部の河川の側や湧水の出る場所を除くと、大部分の地域は灌漑用水の欠乏に苦しんでいた（張 2006、14頁）。

新社区地はもともと清朝時代には統治地域の外にあり、タイヤル族（泰雅族）の狩猟場であり、漢人による開拓は上手くいかなかった。18世紀半ばになると、原住民と棲み分けのための土牛溝が設置され徐々に漢人の入植が進み、18世紀後半には正式な開墾が始まった（同上、23-24頁）。移住する者の中で最も多かったのが客家であり、現在でも新社区は石岡区・東勢区・豊原区と並んで客家が多く住む地域である。

また清朝時代には、「九庄媽信仰」という信仰体系が生まれた。九庄媽信仰とは、一年ごとに九つの村（新社区、畚箕湖、山頂、大南、土城、馬力埔、擺頭店、烏銃頭、水底寮）を回って行わ

れる廟を持たない媽祖信仰のことで、新社の信仰世界の中心をなしている（江 2014）。伝承によれば、タイヤル族の首狩の脅威に晒されていた漢人たちが媽祖に祈りを捧げたところ、首狩が行われなくなったことから、当時人口が集中し始めていた九つの村で順番に祭祀が行われるようになり、「九庄媽」と名付けられたという（臺中市文化資産處 2018、3 章 23-24 頁）。新社の開拓の歴史と結びついたこの信仰体系は、2009 年に文化資産として登録された。

20 世紀に入ると日本が台湾でのサトウキビの品質改良と生産量の増大に取り組み始め、新社台地でも養成所建設のための調査が行われるようになった。1909 年（明治 42 年）に、台中で成功した日本人実業家の松岡富雄が馬力埔高地に約 10 ヘクタールのサトウキビ苗圃を設置し、そこで作った苗をサトウキビの試験場で育てたところ、まずまずの成果を納めた。ここからこの地域のサトウキビの生産の歴史は始まり、1913 年（大正 2 年）11 月 11 日には正式に大南庄蔗苗養成所の建設が決定された（張 2006、47 頁）。

新社台地では、それまで雨水に頼った耕作をおこなっていたため、いかにして安定的な灌漑用水を確保するかが課題となった。しかし、灌漑用水を確保するには 3 つの課題があった。一つ目は、養成所が海拔 455 ～ 545m の高地にあるため大甲溪から水を引いてくるのが困難なことである。二つ目は、地表を覆うのが粘性の高い赤土で、0.3 ～ 0.9m 掘ると砂利の層が現れ、さらに地下の水位が低く井戸を掘って水を汲み上げることが困難なことである。三つ目は、養成所が新たに導入した「爪哇大莖種」（爪哇はジャワの意）という品種が、それまでの灌漑用水を必要としない「爪哇細莖種」に比べて多くの水を必要としたためである（同上、56 頁）。この問題の解決のため大甲溪上流から水を引く長距離の用水路として作られたのが白冷圳である。



図 1 白冷圳・第二逆サイフォン

白冷圳は、1927年に建設が企画され1932年に完成した。和平区にある取水口から新社中部の円堀までの幹線用水路と、円堀からは二つの支線用水路により新社台地全体に水を送っている。白冷圳の特徴は、全長が約17kmなのに対し、取水口（入口）と新社台地（出口）との高低差が23mしかない点である。途中には山や谷があり、それらを乗り越えるためにさまざまな技術が駆使されている。中でも注目すべきは、1号「阿寸溪」（129m）、2号「抽藤坑溪」（346m）（図1）、3号「矮山坑溪」（44m）の三箇所で作られた、「逆サイフォンの原理」を用いた管である。「サイフォンの原理」が水源よりも高い位置にある障害物を超えて水を送る方法であるのに対し、「逆サイフォン原理」は水源よりも低い位置を通して水を送る方法で、噴水や谷を経由する際に用いられる。自然の地形を活かしたこの工法によって、電力を用いずに多くの障害物を乗り越えて新社台地に水を供給することが可能となった。とくに最長の二号逆サイフォンは白冷圳の目玉であり、現在では側に白冷圳記念公園が建設されている。

白冷圳を建設したのは、磯田謙雄（1892～1974）という日本人技師である。磯田は、石川県金沢市に生まれ、東京帝国大学を卒業後、1918年から台湾総督府で働き始めた。台湾に渡ってすぐのころは、同じ金沢出身の八田與一のもとで嘉南大圳の調査計画にも参加し、八田とは公私に渡って交流を深めた。白冷圳のほかにも、1936～1939年には台湾北西部の新竹市に流れる「頭前溪」の治水工事を行った（磯田謙雄ブックレット編集委員会編 2015）。後述する「まちづくり」（社区総体营造）の過程で磯田の再評価が起こり、白冷圳記念公園には磯田の銅像が建てられた（図2）。

第二次世界大戦が終結すると、白冷圳と養成所は台湾省政府農林庁へと引き継がれ、サトウキ



図2 磯田謙雄像（白冷圳記念公園）

ビ以外のさまざまな種苗の生産を行いながら事業を拡大していった。しかし、1980年代になると老朽化が深刻なものとなった。1986年から1996年の間は毎年修復計画が提出されるも、実際の工事には至らなかった（林 2015、22 頁）。そんな時に起きたのが台湾中部を襲った 1999 年の九二一地震である。台湾災害史に残るこの大地震によって、新社は大きな被害を受け、白冷圳も倒壊することになった。

震災前の白冷圳の認識についても触れておこう。筆者が新社區で震災以前の白冷圳へのイメージを聞いた時に、社區營造団体や地元住民は口々に「有名ではなかった」と答えた（2023 年 9 月）。ほかにも「名前は知っていても日本人が作ったことは知らなかった」と答える人もいた。とくに若者に関しては名前も知らなかったそうだ。それに対し現在では「みんな知っている」と答えた。また、日本側では主任建築士である磯田の出身地の石川県に本社を置く北國新聞で「白冷圳」「磯田謙雄」と検索すると、最も古い記事は同じ 2011 年 10 月 12 日付の朝刊記事だった。以上は限られた事例にすぎないが、白冷圳が日台において有名ではなかったことはある程度確かである。

第 3 節 白冷圳をめぐる「まちづくり」

1. 社區總體營造概要

本節では、震災後に展開された白冷圳をめぐる「まちづくり」の過程を追っていく。ただしここでいう「まちづくり」には、1950 年代から続く台湾の「社區」（コミュニティ）に関する文脈が関係してくるため、カッコ付きで示す。まず本節前半では「社區」関連政策について簡単に説明し、後半から具体例に入る。

「社區總體營造」とは 1990 年代に生まれた台湾にいくつかある「社區」（コミュニティ）関連政策の一つである。そもそも「社區」とは 1920 年代に中國大陸の人類学者たちが community の訳語として発明した学術用語だったが、1950 年代に国民党が国連開発計画（UNDP）支援の“community development”を受け入れる際にそれを「社區發展」と直訳したことで行政用語にも使用されるようになった（前野 2024、144 頁）。

モデル事業ののち台湾全土での「社區發展」の実施が決まると、社區發展工作綱要（1968 年制定）で「社區」は「各県の郷・鎮・市公所および市・区役所はそれぞれの管轄区域内で貧困後進の地域を選び 1 個の社區として区画する」（第 10 条）と定められたが、「社區」とは何か、「社區發展」の担い手についても明確な記述はなかった（同上、145 頁）。そのため国連が目指したのは住民が主体となった地域の發展だったにもかかわらず、「社區發展」の実態は行政主導の「上から下」のインフラ建設事業だった（簡 2007）。

1983 年に制定された新たな準拠法令・社區發展工作綱領により、「社區」は「歴史的関係、遅延的状况、人口分布、資源の多寡、生態上の特性、住民の意向・興味・共同需要」に依拠し、住民過半数の同意により認定されるものと定義され、担い手も住民から選出された「社區理事会」と定められた。1991 年の新たな社區發展工作綱領により、社區理事会是民間任意団体である「社區發展協會」へと改組され、「社區」の範囲も歴史・文化を共有する住民の意向を反映すると言

いつつも、区画の決定権は郷鎮政府にあったため行政村（村里）サイズにほぼ相当する体制が維持された（前野 2024、145 頁）。

内政部主導の「社区發展」に対し、1990 年代半ばからは中央各省庁が個別に「社区」へ補助支援ができる諸政策が出現し、それらを総称して「社区総体营造」と名付けられた。「社区發展」と「社区総体营造」の政策上の最も大きな違いは、前者の『「社区＝コミュニティを支援する」との立場から、つながりの『消えゆく』ないし『崩壊した』地区を支援し『「社区＝コミュニティとして再生する』』ことへの立場の変化であった（同上、146-147 頁）。

また制度運用の面から言えば三つの変化があった。一つ目は、前者では内政部に限定された予算ルートがほかの中央官庁にも広がったこと。二つ目は、補助の対象が社区發展協会以外の「登記された民間団体」へと拡大されたこと。三つ目は、行政単位（村里）に限らずに任意の空間を「社区」として届け出て活動できるようになったことである（同上、147 頁）。

1999 年に本事例とも関連する九二一地震が発生すると、行政院農業委員会よりも迅速な復興プランを出したことから、行政院文化建設委員会（以下、文建会）が 2000 年代の「社区」関連政策を主導する立場を獲得していった。具体的には村落に支援の受け皿となる中間団体・重建委員会を設置し、外部から送られてくるさまざまな支援を整理・統合するシステムを構築した（同上、148 頁；照本ほか 2009）。

予算ルートの自由化により、補助支援プログラムは 2000 年には 12 部局 20 プログラムまで拡大し、当時の民進党政権が整理に取り掛かるも不十分に終わった。2008 年に政権を奪取した国民党政権は、民進党政権で好んで使われた「社区総体营造」を「農村再生」と呼び変え、より農村部に焦点をあてた政策を打ち出していった。一連の政策の主管には、文建会ではなく、行政院農業委員会水土保持局が置かれた。ただし「農村再生」は、消えつつある既存の村落と、「社区＝コミュニティ」としての再生という認識・立場のうえに実施されており、これは「社区総体营造」を引き継ぐものでもある（同上、148-150 頁）。

以上のような過程を経て、乱立した政府補助プログラムは整理され、「社区総体营造」と「社区發展」は「社区营造」と総称されるようになり、現在では「社区营造は比較的地域内で制度的に正統性をもつ社区發展協会や郷鎮市公所本体と、社会運動にルーツをもつ社区营造団体が併存しながら地域社会で事業を行っている」（星 2021、93 頁）。以下では、震災を機に誕生した白冷圳をめぐる社区総体营造団体「白冷圳社区総体营造促進会」（現・白冷圳水流域發展協会）の活動を提示する。主な参考文献は、団体の活動を追った林慧真（2015）の修士論文と、団体の活動成果でもある新社の歴史・文化・生態をまとめた『白冷圳に恋して——新社郷の文化生態めぐり——』（『戀戀白冷圳——新社郷文化生態巡礼』）（2002）である。

2. 被災の経験と社区総体营造の開始

1999 年 9 月 21 日に発生した九二一地震は、M7.3、死者 2,455 人、負傷者 11,305 人（重傷者 704 人）という大規模なものだった。台湾中部の南投県集集鎮を震源とし、南投県と台中県（2010 年に台中省轄市と合併し台中市になった）を中心に大きな被害をもたらした。建物への被害も甚

大で、全壊 38,935 戸、半壊 45,320 戸にのぼった。被害損額は 3,623 億元（日本円で約 1 兆 4 千億円）でこれはその年の政府歳入額の 18%にあたる（近藤ほか 2003、256 頁）。

産業の 80% 以上が農業を占める新社において白冷圳の修復に時間がかかるのは死活問題であった。しかし、相次ぐ大雨と土砂災害により、地震から一年が経っても完全復旧の目処は立たなかった（呉編 2002、39 頁）。

そんな中、白冷圳の復旧に関しては賛成派と反対派で意見が割れていた。反対派は、近年農業が衰退していることや、台湾が WTO に加盟したことで農家に生き残る道があるか分からないことを理由に白冷圳の復旧に消極的だった。一方、賛成派は、より短距離で水を供給できるよう白冷圳を改良することで再建費用を削減することを提案した。意見が分かれる中、台中農田水利会大南工作站を退職した余秋金はただ一人、この案には超大型のモーターが必要となり、費用もかかれば水の供給量も限られることから現実味がないと問題点を指摘した上で、白冷圳のもつ文化的意味を見つめ直し、政府にその価値を再評価させ、絶対に修復し残すべきだと主張した⁴。白冷圳は日本人が設計し建造したものだが、そこには先人の血と汗と犠牲が溶け込んでいるというのが余の主張だった。その後、地元の農家である徐炳乾が、自然の地形を活かした構造や、歴史文化的な価値をもっていることを強調し復旧の重要性を呼びかけた。こうして一部の住民により白冷圳の復旧と文化的価値の発信を目的とする運動が始まった。2000 年 12 月 16 日には新社區の住民によって組織された「社團法人台中縣新社鄉白冷圳社區總體營造促進會」（以下、促進會）が結成され、「九二一重建委員會」から 7 億台湾元あまり（当時）を手にするようになった（林 2015、24 頁）。

促進会の成立には、①農業の発展と農民福祉の促進を目的とする「財団法人稻草人基金会」（1998 年設立）の代表であり、立法委員でもある林豊喜の存在、② 2000 年 5 月に始まった徐を中心とした「白冷圳復活運動」、③「白冷圳再建計画案」の成立（2000 年 6 月 19 日）という三つの重要な要因があった。

まず、林は出身地が白冷圳の運ぶ水を利用していたこともあり、再建運動に積極的に参加し、白冷圳の整備を急ぐよう働きかけた。林が自身の政治的立場を利用しながら活動するのに対し、「白冷圳復活運動」は住民の草の根運動である。発起人であり中心人物の徐炳乾⁵は、宣伝カーを使って白冷圳の修復を訴えかけたり、住民に白冷圳の歴史について教えたりした（同上、24 頁）。徐の活動は林の支持も得ることとなり、地域住民たちが「白冷圳再建推進委員会」を結成した際には林を委員長に推薦することで、白冷圳の再建の重要性を示した。このことはコミュニティ＝社區の結束を強めた要因だとされている（同上、28 頁）。

促進会成立の最後の鍵である「白冷圳再建計画案」は、2000 年 5 月 29 日に林によって經濟部水資源局（現・水利署）に提出され、同年 6 月 19 日に会議が開かれた。会議の結果、70 年の歴史をもつ白冷圳は文化的・歴史的価値が高く、新社郷（現・新社區）に生活用水や農業用水などを供給するだけでなく、下流にある豊原浄水場への水の供給にも影響を与えているため、再建計画が必要であるとされた。再建においては、經濟部水資源局が資金を出し、できる限り白冷圳の原風景を保存しながら行うことが推奨された。さらに、再建には地域コミュニティと協働するこ

とが規則に盛り込まれた。白冷圳再建推進委員会は促進会として再編され、台中県政府の許可を経て2001年10月15日に台中地方院に登録された。代表には徐炳乾が任命された（同上、35頁）。

以上が促進会の成立までの大まかな流れである。先述したように、当時は地元の人でも白冷圳の存在は知っていてもその歴史や技術的特徴などは知らなかった。そこで、再建計画と並行して皆で白冷圳のことを調査したり、地元の人々のコミュニティ意識を高める動きが起きた。

3. 促進会の活動

林豊喜を代表とする稻草人基金会は、新社の人々のコミュニティ意識を高めるため、2000年7月23日に新社の歴史・文化を探索する「白冷圳のルーツを探る旅」（白冷圳探源之旅）を主催した。ほかにも経済部水資源局監督のもと白冷圳重建推動委員会が主催したドキュメンタリー「上水の希望」（上水的希望）が製作された。ドキュメンタリーには、先人たちへの感謝と人々が協力して白冷圳を再建することへの期待が描かれており、2000年9月には稻草人基金会から新社の文化教材として出版された（同上、28-29頁）。

また2000年10月14日は、白冷圳ができてから69年目の記念日だった。九二一地震とその後の二度の大雨によって、白冷圳はまだかろうじて水を供給している状態だったが、稻草人基金会は「社区総体营造」の名の下、記念会を開催した。この会には、徐炳乾や林豊喜だけでなく、歴史学や農学、生物学の専門家が招待され新社の特性についての講演や、台中県文化センターの主任による「社区総体营造」についての講演も行われた。踊りや歌も行われ、参加者は1000人を超えたという（同上、30-32頁）。これ以降、毎年10月に「白冷圳文化節」が行われるようになった。2002年には、促進会は現・台中市清水区の社区総体营造に深く携わっていた吳長琨とともに、白冷圳を含めた新社の歴史・文化を調査した結果をまとめ、『白冷圳に恋して——新社郷の文化生態めぐり——』（『戀戀白冷圳——新社郷文化生態巡礼』）（2002年）を出版した。同書は、おもに日本統治以前の新社の開拓史、白冷圳の歴史、新社の民間信仰の「九庄媽信仰」から構成され、新社における白冷圳の重要性を説明する教科書的書物である。

2002年4月には吳が新社の調査をしていた際に荒れ果てた地に石碑を偶然発見した。後にこれが戦前に台湾人の学生を救うため川に飛び込んで亡くなった日本人教師・山岡榮の記念碑だとわかった、翌年には周辺環境整備が台中県文化局協力のもと企画された（同上、52、114頁）。

日本統治期の負の歴史の調査も行われている。促進会第三期（2005～2006年）⁶では馬力埔事件の歴史の調査が行われ「馬力埔事件記念公園」の建設計画が行われた。馬力埔事件とは、1913年に起きた強制的土地買上げに端を発する台湾総督府と現地住民との衝突事件である。死傷者も出したこの事件は、台湾における初期の農民運動の一つとして記憶されている。

2010年に台中県と台中市が合併し、2012年に文化建設委員会が文化部に変更されると、促進会も2012年に正式名称を「台中市白冷圳水流域社区総体营造促進会」に変更した。同年は白冷圳完成から80周年記念で、白冷圳を建設した磯田謙雄の家族と「金沢市日台親善議員連盟」、「八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会」が特別招待され、磯田を讃える式典に参加した（同上、71-72頁、104頁）。

第4節 日台交流と景観創出

本節では社区総体营造後の白冷圳をめぐる日台の交流とそれによってどのような景観が創出されたかを新聞記事から見ていく。第三節で見たように、白冷圳は地元でも有名な存在ではなかったが、震災後の促進会の活動を経て、「今では地元の人には誰でも知る存在」（発展協会スタッフ談）となっている。

しかし新聞調査により、日本では白冷圳の主任建設技師・磯田謙雄の出身地である石川県金沢市との交流が始まったのは、奇妙なことに震災から10年以上経った2011年になってからだったことが明らかとなった。このことを示すのが、石川県で発行されている北國新聞2011年10月12日付の朝刊にある『『水利の父』もう一人』と題された記事である。先述したように、これは「白冷圳」「磯田謙雄」が出てきた同紙で最初の記事である。この記事では、磯田は新社では「よく知られた存在」（原文）であり、来年通水80周年に向けて現地の人々が今年（2011年）9月に磯田の情報を求めてきたが、磯田に関する資料のほとんどは台湾にあり資料が見つからず、彼を知る人も見つからないため情報提供を求めるというものである。また同記事によれば、この時新社と金沢の仲介役を果たしたのは台湾の前駐日代表・許世楷であり、許は台中では若い世代が白冷圳に関心をもち金沢との交流を望んでおり、また自身が2008年に金沢を訪問した際に辰巳用水が逆サイフォン方式を採用していることを知り、磯田がその技術を持ち込んだのではないかと想像していると語った（北國新聞2011年10月12付朝刊）。翌日の13日付朝刊のデスク日誌でも『『磯田謙雄』情報求む』と題して「日本から見れば土木技師の一人かもしれないが、台湾では『命をくれた恩人』」（原文）である磯田の情報提供を呼びかけている（同上、2011年10月13日付朝刊）。さらに翌日の14日の記事では、磯田の自宅が金沢市内に現存し、長女が都内で生活していると判明したことと、磯田をよく知る人が「穏やかで控えめ」な人柄だったと話したことが記されている。同記事によれば、磯田の部下だった男性も磯田から台湾時代の話聞いたことはなく、「北國新聞を読んで初めて台湾での仕事を知った。穏やかな人で、自分を宣伝することはなかった」と語った（同上、2011年10月14日付朝刊）。

北國新聞によれば、磯田の長女である松任谷良子も父が白冷圳の建設に携わったことを知らなかった（同上、2011年10月31日付朝刊）が、同紙のインタビューをきっかけに2011年11月29日に初めて白冷圳を訪れ、促進会代表の徐炳乾と交流した（同上、2011年11月29日付朝刊）。以上の記述から、磯田謙雄は2011年まで地元金沢では公的には有名な人物ではなかったこと、控えめな性格故か知人や家族でさえも白冷圳のことは知らなかったのである。長女は2012年の通水80周年記念の「白冷圳文化節」に参加し、「私は白冷圳とともに年を重ねてきた。大切に守ってくれてありがとう」と言葉を残した（同上、2012年10月16日付朝刊）。

ほかにも同じ金沢の著名な土木技師・八田與一に関連した市民団体「八田技師夫妻を慕い友好の会」が、磯田と白冷圳の宣伝に寄与した。同団体は、八田の業績を広めながら日台交流を行ってきた実績がある（清水2009）。同団体の世話人であり地質学の専門家の中川耕二は、八田の後



図3 日台友好の橋

輩である磯田も技術的な面から業績を検証するために、台湾の知人から資料を取り寄せ翻訳し、完成した資料は金沢ふるさと偉人館に提供した（同上、2012年2月10日朝刊）。同記事によれば、中川は3本の逆サイフォンに注目し、それが辰巳用水を参考にしたと推測した。

こうして始まった日台の交流は、物理的な景観に反映された。2012年4月には日台親善議員連盟会長・安達前が現地と共同で磯田の功績を讃える顕彰碑を建てることを提案し（同上、2012年4月25日付朝刊）、同年10月の「白冷圳文化節」でお披露目がなされた（同上、2012年10月16日付朝刊）。また、今年の文化節で白冷圳の側にある橋が「日台友好の橋」（図3）と名付けられ、記念植樹が行われた（同上）。さらに、この会で安達が台中市市長・徐中雄に磯田の銅像建立を求め、2013年に完成し二号逆サイフォンの側に設置された（図2）。安達はほかにも台中市内で金沢の文化を紹介する「金沢街」を計画し（2023年12月現在実現せず）、八田技師の台南市に加えた新たな観光ルートの構築を目指した（同上、2013年5月1日付朝刊）。

2017年11月には金沢市議会と台中市議会が友好交流規定を結ぶことになったが、両者は磯田の存在がきっかけとなったことを述べている（同上、2017年11月11日付朝刊）。こうした日台の交流の結果、白冷圳流域発展協会（旧・促進会）は、日本と台湾との相互理解を促進したとして、令和4年（2022年）度の外務大臣表彰を受賞した。2023年には磯田が「金沢ふるさと偉人館」に加えられた。

第5節 白冷圳と辰巳用水

1. 台湾の文化資産の歴史

本節では、白冷圳の文化資産（日本の文化財に相当）認定への申請書からどのような点が白冷圳の文化的価値とみなされているかを明らかにする。その前に本項で台湾における文化資産の概要を示す。

文化資産保存法は、1982年に公布された台湾で最初の歴史的環境を保全する法律で、日本の文化財保護法に相当する。1982年の同法は、総則、古物、古蹟、自然文化景観、民族芸術および関連文物、罰則および附則の8章で計61条だった。この時点の同法の目的は「文化資産の保存」による「国民の精神生活の充実と中華文化の発揚」にあり、建造物を対象とする古蹟指定の権限も中央政府が握り、1級から3級までランク付けがなされた（宮畑2015、98頁）。1997年には最初的大幅な修正がなされ、ランク付けは廃止され、古蹟指定も自治体が行うようになった。

1982年から1997年は、台湾社会が大きく変動した期間でもある。戒厳令が解除され、民主化が急速に進んだ。日本統治期の古蹟認定が1995年を境に急増したように、日本の文物も廃棄の対象から「台湾にとって」価値のあるものへと変化していった。それは、文化資産保存法が指定権を独占した中央政府による中華文化の発揚を目的としていたものから、台湾が主体性をもって台湾の文化として認定するものへと性質を変化させていく過程でもあった（上水流 2007）。そして、台湾社会の変化が同法に最も色濃く現れたのが2005年の全面改正である。計61条から104条へと大幅に内容が拡充され、対象も古蹟・歴史建築・集落、遺跡、文化景観、伝統芸術、民俗および関連する文物、古物、自然地景の七項目に変更された。同法の目的は、「文化資産の保存」から「文化資産の保存及び活用」へ、「国民の精神生活の充実と中華文化の発揚」から「国民の精神生活の充実と多元文化の発揚」へと改正された（宮畑 2015、99頁）。この全面改正が現在の文化資産保存法の基礎となっている。

また、2003年からはユネスコに加入していない台湾における、世界遺産相当だと認められる文化資産を「台湾世界遺産潜力点」（以下、潜力点）として認定する政策が行政院文化建設委員会により始まった。同年には11ヶ所が登録され、2009年には17ヶ所、2010年には18ヶ所が登録され現在にいたる。藤野陽平によれば、この時期に潜力点が始まったのには、李登輝の本土化政策と2000年～2008年の民進党政権下における台湾アイデンティティの高まりが関係している（藤野 2016、171頁）。また、藤野は認定物の特徴として日本統治期関係のものの多さを挙げ、そこに日本の保守層を刺激する文化財の「ゆるやかな政治利用」（藤野 2016、174頁）を指摘している。藤野の指摘から、潜力点は文化資産保存法の変化と同様に台湾のナショナリズムの流れに関連するものとも言える。

2. 潜力点申請にみる白冷圳の「価値」

白冷圳を文化資産として登録する動きは、2007年の会議で促進会が白冷圳を文化資産として認定するよう当時の台中県文化局に要請すると決定したことに始まる（林 2015、64頁）。そして、2016年に「文化景観」として台中市文化資産に登録された。同年には、白冷圳水流域發展協会が台中市文化局・文化資源部に白冷圳を潜力点に登録することを提案した（白冷圳水流域發展協会スタッフ談）。2023年12月現在まだ登録されていないが、申請のための基本調査資料が公開されており、そこからはこれまでの日台のさまざまな活動の結果白冷圳にどのような「価値」が付与されているかが窺える。

まず、申請理由である。潜力点の申請基準は世界遺産条約に則り、「顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)」「完全性 (integrity)」「真正性 (Authenticity)」(World Heritage Center 2021) を示すことが求められる。そしてユネスコが定める10個の基準の内一つ以上を満たしていることを条件としている。白冷圳の場合、(1)「人間の創造的才能を表す傑作であること」と(4)「人類史上の重要な段階を物語る建築物、建築的または技術的総体、あるいは景観の顕著な例であること」の二つがあてはまるとされている（臺中市文化資産處 2018、6章39頁）。そして二つの基準を満たす白冷圳が潜力点に登録されるべき理由は、以下の4点から説明されている

（同上、1章4頁）。

1. 日本が台湾を領土とした後、「工業は日本、農業は台湾」という目標のもと、台湾の製糖業の発展に力が入られ、大南庄種苗養成所（現・行政院農業委員會種苗改良繁殖場）が設立された。ここは、サトウキビ作りの改革と品種の改良に力が入られ、日本統治時代の1913年から戦後の1960～1970年代まで台湾の製糖業発展の最前線であるサトウキビの種苗の繁殖と供給という任務を担ってきた。
2. 白冷圳は日本統治時代に新社の地にサトウキビを植えるのに必要な灌漑用水を供給するために建設された。導水路はどれも地形の変化が生み出した高低差を基にした自然工法を利用し、険しい山の斜面に沿って建設された。白冷圳は近代水利技術の粋、産業経済発展の生命線、人と河の頼り合い、美的イメージなどの要素が組み込まれた重要な施設である。新社地域の文化や歴史、自然生態とも関係しており、文化景観が強調する人間と自然の相互作用の意義に沿っている。
3. 範囲内には豊富な文化資源が含まれており、すでに歴史建築として白冷圳取水口、抽藤坑倒虹吸管（2号）、矮山支線過水吊橋が登録されている。
4. 「文化景観登録および廃止審査方法」第2条第1項第1、2、3、4号に並んだ基準に適合している。

要約すれば台湾製糖史における貢献、卓越した技術、白冷圳を中心とした人間と自然との関係、関連する歴史的建築物の存在が潜力点の根拠となっている。それぞれの要素の詳細は、申請書類でも章ごとになされているが、本論は2番目の科学技術に関する記述に焦点をあてたい。

白冷圳の技術的目玉は、自然の地形を生かした長大な逆サイフォン方式である。この技術は、石川県金沢市にある「辰巳用水」という水路にも用いられている。辰巳用水は1632年に板屋兵四郎により作られた用水路であり、逆サイフォン方式（日本では「伏越の理」（ふせこしのことわり）と呼ばれていた）を用いた日本で最初の水路である。全長は約11km、兼六園の噴水の水源となっている。金沢市は、白冷圳の主任技師・磯田謙雄の出身地でもある。筆者が新社現地に行った際、白冷圳には日本の古い技術が使われていると説明されたが、実際に白冷圳が辰巳用水を応用したことを示す資料はない。しかし、潜力点の資料には辰巳用水の技術的価値に関する記述が数十頁に渡って学術的に説明されている。

「日本金沢市の辰巳用水と新社白冷圳の検討」と題された節は、同じ工法が用いられた二つの水路は異なる時空異なる需要のもと建設されたが、その文化と技術の価値は無視することはできないという記述から始まり（同上、4章65頁）、いかに白冷圳と辰巳用水が「似ているか」が説明される。申請書によれば、白冷圳と辰巳用水の主な共通点は、水トンネルと逆サイフォンである（同上、4章66頁）。水トンネルとは、水路におけるトンネル部分のことで、通過する場所の岩盤や水路の曲がる箇所に合わせて作られる。辰巳用水では当時では珍しかった水トンネルが全長10kmのうち3.3km導入され、白冷圳では全22箇所、総長7kmに渡って導入された。両者が対応した岩盤は当然異なり、白冷圳にはコンクリートで覆われているため違いはあるが、白冷圳の水トンネルの高さが平均1.8mだったことは辰巳用水ととても近いと記述されている（同上、

4章66頁)。ほかにもユネスコの条件の一つ「人類史上の重要な段階を物語る建築物、建築的または技術的総体、あるいは景観の顕著な例であること」に関する項では、山や谷を超えるためのさまざまな技術を指摘した後、白冷圳が400年の歴史を有する金沢の辰巳用水を基礎としながらそれよりも大規模であることがアピールされている(同上、7章15頁)。

また興味深いのは、「石川県金沢市辰巳用水と結びつける」と題された世界遺産登録に向けた戦略が書かれた項である。ここでは、世界遺産の登録状況や台湾の国際関係を考慮して、「シリアル・ノミネーション」の可能性を探っている。「シリアル・ノミネーション」とは、同じ歴史・文化を共有する異なる地域にある文物をまとめて世界遺産に登録する手法である。世界遺産まではいかなくとも、たとえば嘉南大圳はこの手法をもって日本の土木遺産に登録されている。同項では、白冷圳を400年の歴史を有する辰巳用水系列の水利施設として登録する可能性が提案されている(臺中市文化資産處2018、7章16頁)。この提案は実際に金沢と台中の間で話されたそうだが、2023年10月現在実現には至っていない。

第6節 考察：植民地経験の動態性

以上から明らかなように、白冷圳の歴史性は被災、復興、日台交流などを経て人とモノの関係性の中で構築されてきた。以下ではその動態性について「人とモノ」「人と人」「モノとモノ」という視点から検討しよう。

1932年に建設された白冷圳は、1980年代には老朽化が進み、震災により倒壊した後も農業の衰退を理由に廃棄も検討されるような、少なくとも何としてでも復旧が必要な存在ではなかった。筆者が聞き取りを行なった白冷圳水流域発展協会の現職員たちも、当時の様子について口を揃えたように「有名ではなかった」と答えた。また第五節の新聞分析から明らかにしたように、日本においても白冷圳および主任技師・磯田謙雄は有名ではなく、同僚や家族でも白冷圳について知らなかった。

インフラに関する人類学的議論において、インフラとはあたり前であるがゆえに人々の関心の対象とならない「不可視」の存在だが災害などにより壊れることで注目され「可視化」される(Star and Ruhleder 1996、113頁)。そうした「不可視」のインフラをあえて分析対象としたり、故障などによりインフラが「可視化」される様は「インフラの反転」(infrastructural inversion)(Star and Ruhleder 1996; Harvey et al. 2016)と呼ばれるが、これは白冷圳にもあてはまる。1999年の震災により破壊され新社の人々が「まちづくり」(社区総体营造)を通じ白冷圳の歴史的・文化的意義を発見していくのは、「不可視」の白冷圳が「反転」し「可視化」=注目される過程である。そして第3節で見たように、被災による「反転」を機に新社の人々と白冷圳=人とモノの関係性は変化していった。彼らは白冷圳の歴史や文化的価値を本やドキュメンタリーという形で残し、毎年「白冷圳文化節」を開催するようになった。こうした日本の出自を記憶した上で植民地期のモノをローカルな文脈に落とし込む作業は、上水流(2016)のいう「内部化」現象だと言える。ただし、これらの行動を単純な親日的行動ととらえてはいけない。彼らは同時に日本側と現地の

衝突事件（馬力埔事件）という負の歴史の記憶の創造も同時に行っていた。彼らの「まちづくり」は、新社の歴史的・文化的文脈を明らかにしそこに白冷圳を位置づける運動だったと表現する方が正しいだろう。これにより白冷圳は新社にとって必要不可欠な歴史的・文化的価値を有する水源として意味づけられるようになった。

第4節で見たように、「まちづくり」は新社の人々の白冷圳への認識を変容させたが、意外にもそこに日本の人々が関係するようになったのは2010年代になってからだった。2011年に北國新聞で初めて「白冷圳」「磯田謙雄」が登場し、ここから磯田の地元・金沢で彼に関する情報の収集が急速に進んだ。金沢は日台ですでに有名だった嘉南大圳の主任技師・八田與一の地元であったこともあり、台湾で大きな水利事業を成した磯田謙雄の発見は金沢側にとっても関心を引くものだっただろう。「八田技師夫妻を慕い友好の会」の協力もあり、台湾から取り寄せた資料を基に磯田の業績の整理がされ金沢偉人館に収められた。白冷圳を通じて新社と金沢の人と人の交流が生まれ、その影響は物理的な景観に反映された。「磯田謙雄像」や「日台友好の橋」に代表されるように、白冷圳は日台の金沢と新社の絆の証として意味づけされるようになった。こうした現象は、「日本神」に関して藤野（2022）が分析したような、日台の交流の中で生まれる景観である。ただし、筆者が白冷圳関連施設を回った印象では、藤野が指摘した日台のズレのようなものは存在せず、あくまで現地の人々が建設に関わったものが配置されていた。新社はアクセスも悪いため、観光客が押し寄せるような事態になっていないことも要因の一つだと考えられる。

また日台の交流は、白冷圳の新たな側面に人々を気付かせた。前駐日代表・許世楷や地質学の専門家の中川耕二といった人物は、逆サイフォン方式と磯田の出身地が金沢であることから、白冷圳と辰巳用水というモノとモノの関連性に注目したのだ。これは金沢と新社どちらかを知っているだけでは無理で、両者の交流が生まれたことで初めて意識されることだ。そして第5節で見たように2018年の潜力点申請の段階では400年の歴史を有する辰巳用水の工法を台湾で大規模に展開したことが白冷圳の「価値」としてアピールされていた。ただ注意したいのは、白冷圳が辰巳用水を参考にした歴史的事実はないという点だ。あくまでも金沢出身の技師が古くから使われる同じ工法を用いたという事実から類推されたものにすぎない。しかし、細かな研究により「科学的確からしさ」を構築することは可能である。それによりすでに新聞だけでなく一般書でも両者の結びつきが紹介されるようになっている（緒方2022、34頁）。

無名のインフラから地域に必要な水源、日台交流の架け橋、400年前の工法を引き継ぐ普遍的価値を有するインフラへ。人々が白冷圳に与える意味＝歴史性は時代とともに変化してきた。それは自然災害という偶発的出来事、社区総体营造の実践、研究者を巻き込んだ科学的知識が入り混じった、人とモノの関係性の中で再帰的に構築されたものだった。

おわりに

前節では、第2節から第5節までの白冷圳の事例を人とモノ、人と人、モノとモノという視点

からその歴史性が如何に構築されてきたかを明らかにした。

第1節で述べたように、本論でいう「植民地経験の台湾人類学」では、これまでも社会的変化の中で再帰的に構築される「日本」への認識とその要因が議論されてきた。とくに近年のモノに着目した研究では、モノを通じた人と人の関係まで視野に入れている。しかし、本論で扱った白冷圳の場合、辰巳用水との関係を無視することはできなかった。そこで本論では人類学における歴史性の議論を援用し、科学的知識がモノの意味を構築する過程に着目した。逆サイフォン方式という共通点が白冷圳の歴史性に少なからず影響を及ぼしている。本論が提示するのは、台湾における植民地経験の影響や認識の動態性をとらえるためには、時に日台のモノとモノの関係性まで視野に入れる必要があるということである。

本論は文献資料を中心に行った。そのため課題も多く残っている。まず何よりも現地住民への聞き取り調査が不足している。新社と金沢それぞれを一枚岩的に描いてしまっている点は否定し切れない。本論で参照した現地の声は白冷圳を巡る「まちづくり」に参加している人々のものであり、彼らが日本から来た初対面の人間に語る内容にはバイアスがあると考えていいだろう。そのため本論では新聞記事や申請書といった文献の中でどのような歴史性が構築されているかに着目したが、団体従事者以外の人を含め現地の人々が白冷圳をどのように認識しているかをフィールドワークによる具体的なデータを基に明らかにする必要がある。また金沢側の人々にも、白冷圳との関係についてより詳細な調査が必要となる。その際には、新社だけでなく台湾と金沢というより広い文脈が浮かび上がるはずだ。

謝辞

本論文は2023年に東京都立大学に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。修士論文の審査で副査として貴重な批判と助言を頂いた深山直子先生、田沼幸子先生、そして何より修士論文から本論文に至るまで忍耐強くご指導下さった指導教員である河合洋尚先生に深く感謝を申し上げますとともに、多くの有益なご助言をいただいた二名の匿名の査読者の方に心より感謝申し上げます。また名前を出すことはできませんが、白冷圳水流域発展協会のメンバーをはじめとする新社の方々にはインタビューだけでなく様々な面でお世話になった。心より感謝を申し上げます。

本論文は、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究 プロジェクト」経費、並びに「澁澤民族学復興基金」の助成（2023年度採択分）を受けた成果の一部である。

注

- 1 「日本統治経験の人類学」において、なんらかのイメージを付与された日本のことをカッコ付きで「日本」と書く傾向があるため、本論もそれに則る。
- 2 同特集は2020年に『台湾における〈日本〉認識』として出版された。
- 3 後に上水流（2022）は、この4分類に「遊具化」を付け足している。「遊具化」とは、「溶解化」と同様に日本由来のものを消費する立場だが、そこでは日本的要素が強調され、日本に行かずに日本を楽しむことができる。
- 4 余の発言は白冷圳の文化的価値の再発見において重要な役割を果たしたが、余がどのような人物でその後の社区營造にどのように関与したかは不明である。同様に林や徐がどういった人物であるかは立場以上の情報を筆者は有していない。この点は今後の課題となる。
- 5 徐自身は石岡区の出身であり新社区の出身ではない。
- 6 団体の活動年の表記に関しては林（2015）の研究に倣った。

参考文献

- 五十嵐真子・三尾裕子編（2006）『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。
- 五十嵐真子（2006）「はじめに」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社、1-11 頁。
- 磯田謙雄ブックレット編集委員会編（2015）『台湾新社会地を潤した磯田謙雄さん：地域ゆかりの偉人』金沢市城南公民館。
- 植野弘子（2011）「はじめに」植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶』風響社、1-16 頁。
- 植野弘子・三尾裕子編（2011）『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶』風響社。
- 植野弘子・上水流久彦（編）（2020a）『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動——』風響社。
- （2020b）『帝国日本における越境・断絶・残像——人の移動——』風響社。
- 植野弘子・上水流久彦（2020）「序——帝国日本におけるモノの交錯——」植野弘子・上水流久彦（編）『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動——』風響社。
- 緒方英樹（2022）『台湾の大地を開いた人々』理工図書。
- 上水流久彦（2007）「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』第5号、84-109 頁。
- 上水流久彦（2016）「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民主義的研究——台湾の植民地期建築物を事例に——」三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』慶應義塾出版会、261-288 頁。
- 上水流久彦（2022）「旧植民地の建築物の現在」上水流久彦編『大日本帝国期の建築物が語る近代史——過去・現在・未来——』勉誠出版、41-53 頁。
- 河合洋尚（2019）「歴史性と景観建設——寧化石壁客家祖地における時間と空間の資源化——」長谷川清・河合洋尚編『資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から——』風響社、417-442 頁。
- 簡子晏（2007）「民主化の担い手としての社区運動——歴史的発展の分析と書類型——」西川潤・蕭新煌編『東アジアの市民社会と民主化——日本、台湾、韓国にみる——』明石書店、120-172 頁。
- 近藤観慈・林拙郎・王文能・沼本晋也・川邊洋（2003）「1999 年台湾集集地震およびその後の豪雨による土砂災害」『自然災害科学』第22巻第3号、255-270 頁。
- サーリンズ, M. (1993) 『歴史の島々』（山本真鳥訳）法政大学出版局。
- 清水美里（2009）「八田興一物語の形成とその政治性——日台交流の現場からの視点——」『日本オーラル・ヒストリー研究』第5号、203-255 頁。
- 照本清峰・中林一樹・澤田雅浩・福留邦洋（2009）「台湾における 921 地震後の地域再建支援施策と復興過程」『日本建築学会計画系論文集』第74巻第639号、1239-1248 頁。
- 中生勝美（1993）「植民主義と日本民族学——満州の少数民族政策」『中国：社会と文化』第8巻、231-242 頁。
- 藤野陽平（2022）「英霊と好兄弟のあいだ——メディア言説、現地の実践、新たなコミュニケーション——」三尾裕子編『台湾で日本人を祀る——鬼から神への現代人類学——』慶應義塾大学出版会、43-86 頁。
- 前野清太郎（2024）『現代村落のエスノグラフィー——台湾における「つながり」と村落の再構成——』晃洋書房。
- 松田良孝（2020）「沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断絶・散在——宮古地方と八重山地方を比較して——」植野弘子・上水流久彦編『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動——』風響社、177-210 頁。
- 三尾裕子（2009）「パネルディスカッション報告 台湾研究この10年——台湾を対象とした人類学の発展過程——」『日本台湾学会報』11号、57-65 頁。
- 三尾裕子（2017）「植民地経験、敗戦経験を『飼ひ慣らす』——台湾・東港の民間信仰を事例に——」『日本台湾学会報』第19巻、14-28 頁。
- 三尾裕子編（2006）「〈特集〉台湾における日本認識」『アジア・アフリカ言語文化研究』71号、45-203 頁。
- 三尾裕子編（2020）『台湾における〈日本〉認識——宗主国位相の発現・転回・再検証——』風響社。
- （2022）『台湾で日本人を祀る——鬼から神への現代人類学——』慶應義塾大学出版会。
- 三尾裕子・遠藤央・植野弘子編（2016）『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』慶應義塾大学出版会。
- 宮畑加奈子（2015）「台湾文化資産保存法における歴史的、文化的価値を有する「建築物」概念の変容について——植民地期の遺物から土地の記憶へ——」『広島経済大学研究論集』第37巻第4号、95-111 頁。
- 八尾祥平（2020）「パイナップル産業にみる旧日本帝国圏を越える移動——ハワイ・台湾・沖縄を中心に——」植野弘子・上水流久彦編『帝国日本における越境・断絶・残像——モノの移動——』風響社、257-296 頁。
- 山下晋司・山本真鳥編（1997）『植民主義と文化——人類学のパスベクティブ——』新曜社。

- 山路勝彦 (2002) 「人類学と植民地主義——研究史を鳥瞰する——」
山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会、3-42 頁。
レヴィ = ストロース, C. (1976) 『野生の思考』(大橋保夫訳) みすず書房。
Harvey, P., Jensen, C. B., & Morita, A. (2016) ,"Introduction: infrastructural complications,"in Harvey, P., Jensen, C. B., & Morita, A. eds., *Infrastructures and Social Complexity*, London and New York: Routledge, pp.19-40.
Hirsh, E and Stewart, C (2005) , "Introduction: Ethnographies of Historicity," *History and Anthropology*, vol.16,no.3,pp.261-274.
Ohnuki-Tierney, E (1991) ," Introduction: The Historization of Anthropology," in Ohnuki-Tierney, E, ed., *Culture Through Time: Anthropological Approaches*, California: Stanford University Press, pp.1-25.
Star, S. L. & Ruhleder, K (1996) ,"Steps toward an ecology of infrastructure: design and access for large information spaces," *Information systems research*, vol.7,no.1,pp.111-134.
Stewart, C (2016) , "Historicity and Anthropology," *Annual Review of Anthropology*, vol.45,pp.79-94.
WORLD HERITAGE CENTRE (2021) . Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention. (<https://whc.unesco.org/en/guidelines/> よりダウンロード、最終確認 2023 年 10 月 5 日)
江明慧 (2014) 「新社九庄媽信仰初探——一個從世界觀出發的比較觀點——」玄奘大学宗教学系碩士論文。
林慧真 (2015) 「災難与社区発展——台中市白冷圳水流域社区総体营造促進会之研究——」長栄大学碩士論文
台中市文化資産処 (2018) 「白冷圳文化景觀」申請台湾世界遺産潜力点基礎文本調査研究暨提報作業計画
張聖翎 (2006) 「新社河階群的聚落發展与社会空間的塑造」国立台湾師範大学碩士學位論文。
吳長琨編 (2002) 『戀戀白冷圳——新社鄉文化生態巡礼——』台中県、新社鄉白冷圳社区総体营造促進会。
臺中市政府民政局人口管理統計平台
(<https://demographics.taichung.gov.tw/Demographic/WebPage/TCCReport01.html?s=16362531> 2023 年 10 月 5 日
最終閲覧)
北國新聞
——『『水利の父』 もう一人』 2011 年 10 月 12 日付朝刊。
——「デスク日誌『磯田謙雄』 情報求む」 2011 年 10 月 13 日付朝刊。
——「磯田技師自宅、金沢市に現存」 2011 年 10 月 14 日付朝刊。
——「磯田技師顕彰に『感謝』」 2011 年 10 月 31 日付朝刊。
——「父の功績、台中で感激」 2011 年 11 月 29 日付朝刊。
——「逆サイフォン、高度な技術」 2012 年 2 月 10 日付朝刊。
——「磯田技師の顕彰碑を」 2012 年 4 月 25 日付朝刊。
——「白冷圳『友好の象徴に』」 2012 年 10 月 16 日付朝刊。
——『『金沢街』計画、台中市で浮上』 2013 年 5 月 1 日付朝刊。
——「磯田技師の縁で締結 金沢市と台中市の市議会が友好協定」 2017 年 11 月 11 日付朝刊。

(2023 年 10 月 15 日投稿受理、2024 年 2 月 28 日採用決定)